

らはカリコボウズ、または山の神の仕業といわれ、危険の前兆である。②ヘンプ日(月に一度定められた禁猟日)には狩をかく禁じている。この日は鳥獣の天国の日といわれる。自然の秩序が尊ばれていることがわかる。③さかめぐり(干支により決まる禁猟の方向)の方角へ行き狩をしてはならない。生き物を憐れむ神がいるため獲物がいないという。命への畏敬があらわされている。

(2) 死や血に関する不浄を除くしきたり。喪の期間である黒不浄のとき(ヒガカリともいう)、先祖の夢を見たとき、朝にサル(この世を去る)の話をしたとき、家族の者が出産や月経で赤不浄のとき、は狩に行かない。

(3) 狩の成功の妨げとなる邪心を除くしきたり。狩に際して、仲間内でもめることや、出かけに妻と口論すること、を避ける。狩の協働に影響し、神ごととしておこなう狩の成功を妨げるからである。即ち、これは狩やしきたりのもつ聖性を冒瀆する不浄である。

以上のように、人力を越えた力への畏敬を基礎に、死、血、邪、しきたりに従わない穢れた行為を避ける齋忌がおこなわれていたことがわかる。岡田によれば、イミは、共同体のしきたりや宗教的秩序とおして、その根源にある神(神聖)へと近づく「齋(イミ)」と、不浄による神聖の冒瀆を避ける「忌(イム)」とをあわせ持つ概念である(岡田重精『齋忌の世界 その機構と変容』国書刊行会、一九八九、七六および四三二)。

狩猟活動にまつわる危機は、共同体全体にかかわる問題であった。そのため齋忌も共同体全体の規範となる。齋忌を基底的

な態度としたのである。自然の力に畏敬し、共同体持続の知恵(しきたり)を善とした。そしてそれらを穢すおこないを可能な限り除いたのだと考えられる。

真宗「地帯」の再考

——三重県津市における宗教民俗の諸相から——

亀崎 敦司

「真宗と民俗」をめぐる研究では、「真宗地帯に民俗行事は残りにくい」という研究がなされてきた。たしかに、真宗地帯に非真宗的要素が残りにくいという事実は見られるだろう。しかし、そこには研究者のまなざしが介在しており、「民俗か、真宗か」という線引きは研究者の恣意性に左右されてしまっているのではないだろうか。本発表では、そうした一連の「真宗と民俗」の研究を再考し、地区に残る真宗行事や非真宗行事がその地域でいかに伝えられているかをミクロな文脈にひきつけて考察していく。

真宗高田派は、三重県津市一身田に本山専修寺をおく真宗の一派である。長らく関東に拠点を置いていた高田派がこの地方へ教線を拡大したのは一五世紀後半からと言われているが、現在でも本山を中心にして高田派の門徒が住民の多数を占める村落が周辺に広がっている。調査地である津市河芸町北黒田もそのような地区であり、歴史的に高田派の強い影響をうけてきた村落である。北黒田では、教義の観点から見て①真宗的行事と②非真宗的行事が行われている。

まず、①では報恩講や棚経が挙げられる。このとき、行事を

行う基本的な単位は「同行(どうぎょう)」と呼ばれる。例えば、棚経では初盆のあった家に故人と同じセコ(北黒田内の下の組織としての組)の戸主が集まり、このうち年長者から「鈴とり」を出し、この鈴とりが導師役を務める。このとき、地区の寺院から僧侶は呼ばず、読経はすべて住民で行われるので、同行を真宗的な講組織として見ることができるかもしれない。しかし、歴史的にはともかく、現在では同行という語の用いられ方は、「○○の同行のSさんが詳しい」や「△△の同行が今年の当番」といったように使われており、必ずしも真宗的講とは言えない面がある。

次に、②では例年二月一四日に「大般若経転読粥占い」、通称「大般若」が行われている。これは地区に曹洞宗の寺院の僧侶を読んで大般若経を転読する傍ら筒粥形式の粥占を行うものである。この行事の起源伝承として語られるのは、地区に真宗が伝わる以前の宝幢院という寺の僧侶に関係しているが、今までのこの行事が続けられてきた経緯には時代によって担い手や地域が置かれた特殊な状況が関連していると思われる。例えば、近世期には、大般若は「領主御祈禱」を目的として行われた祈禱儀礼であり、その中心的な担い手は「無足人」と呼ばれる津藩(後には久居藩)に組み入れられた郷士であること、担い手たる無足人たちは明治維新後に「土族復族願」を出すなど、彼らの置かれた状況にアイデンティティを持っていたように思われることが挙げられる。また、明治以降はこれらの無足人を中心とした担い手から、北黒田村全体で祭礼が担われるようになるがここでは行事の担当をセコ(通常「同行」と呼ぶ)

が担う輪番制が導入され、儀礼の存続するメカニズムが生成されたことが挙げられる。

本発表では真宗高田派の一村落の民俗の諸相をなるべく細かく見ることによって地域での真宗行事を客体化し、また非真宗的行事が存続されている経緯について分析を行ったが、こうした真宗優勢地帯を対象として宗教民俗学の領域内で研究していくさらなる工夫や分析視覚が必要であろう。

宗教民俗学における現世利益信仰の位置

阿部 友紀

現世利益信仰について言及することは、アンバランスな二つの視座のあいだで行なわれてきたといえる。一方においては、民衆の信仰の「実態」として現世利益をとらえる視座であり、また他方では民衆の「迷信」であり、まともにとりあげるまでもないという視座である。そのような視座において現世利益信仰は、宗教者と民衆、組織宗教と非組織宗教、宗教の本質または宗教の形骸化など多様な捉えられ方をしてきたといえる。本発表では、現在において現世利益信仰の理解が、どのような位置づけをもつてなされているのか、以下の四点を指摘した。

一つには、現世利益信仰をもって日本仏教の特質または基底とする視座である。民衆が仏教寺院に対して様々な要求を行い、また寺院の方もその要求に応答してきたことは周知の事実である。具体的に民衆は寺院に何を要求してきたのか、たとえば圭室諦成は、葬祭の儀礼・治療の呪術・招福の宗教の三点を提示している。これらのうち治療の呪術・招福の宗教は、まさ